

とまれ本書は地理學通論として、中學の地理教授者にとつては良參考書であり、高等専門學校の教科書として又文檢受驗者、一般に人文地理學の現狀を知らんと欲する人に第一に推薦せらるべき良書である。(菊版三百八十頁、定價三圓三十錢、地人書館發行)(米倉)

○佛蘭西革命前後 中村善太郎著

凡そ一國に於ける歴史現象の考察には何よりも先づ同國の詳細なる歴史事象の探究々明が前提とされなければならぬ。然し若し歴史研究者にして其研究對象を單に當該一國の其のみに終始局限するならば、恐らくや其處には唯該博なる史的智識と史實の羅列のみが残され、同歴史の有する意義、特質等の認識は不可能であらうし、假令其が若干可能であるとしても飽迄其は他を知らざる獨斷的自己認識、自己解釋に留るであらう。偏見固陋にして、吾々歴史研究者に最も要請さる可き解釋、意義の伴はざる非科學的歴史觀は多く是に歸因する處と思はれる。斯くて若し歴史研究者にして正しく科學的たらんとするならば、常に個々の歴史事實の探究に依て史的智識を

豊富にすべきは素より、と同時に世界史に對する絶えざる關心と比較研究に依る歴史の意義の認識を怠つてはならない。

一七八九年勃發した佛蘭西大革命は所謂ブルジョア革命中最も典型的なるものと謂はる。然し吾々は此より早く既に世界史上、絶對王政治下にあつて諸種の近代的改革の行はれたる事、イギリスに於ける清教徒革命を絶頂とする著しく宗教的色彩を帯びたる諸ブルジョア革命の遂行せられたる事、將又英本國に自由を要望して起つた北米合衆國の獨立、其他等々何れも「近代的」「ブルジョアの」の名を冠すべき諸改革、諸變革の行はれたるを知つてゐる。而も何故に吾々は特にかの佛蘭西大革命を最も典型的なるブルジョア革命と言ふのであらうか。

斯く云ひ、斯く佛蘭西革命に其意義、其特殊性を認知し得る爲には、よし如何に其が心行く許り詳細を極めやうとも、佛蘭西革命の研究没頭のみに依ては決して充分ではない。其爲には常に世界史上「ブルジョアの」「近代的」改革、變革と稱せらる、諸歴史事象への絶えざる關

心と、相互關聯的視點に立つ其等の比較研究が要求されねばならない。斯くてこそ、茲に初めて豊富なる史實に基き、其に立脚してなされる可き歴史の意義の發見と解釋は成立する。

生前兎角健康に恵まれ給はずとは謂へ、たゆまざる研鑽の勞を終始吾西洋近世史の向上と開拓に向けられ、夙に斯學の權威たり、而も尙、謙讓の美德愈々高く珠玉の篇多く篋底に秘めて發表、學界に問はるゝ事少かつた前東北帝國大學法文學部教授中村善太郎氏、宿痾に冒されて遂に起たず逝去されてより早や三年に垂んとする今、同學部西洋史研究室諸氏の手にて依て整理、遺著として刊行せらるゝに至つた「佛蘭西革命前後」なる名著、筆者茲に拜讀するに及んで今更乍ら恩師、吾大學に講師として御講義ありし日を追憶、哀悼の念切々たるものあるを覺ゆると共に其西洋近世史に對する識見深遠にして、研究の法亦科學的、洵に斯界の重鎮たりしに畏服せざるを得ない。

即ち既に單なる教義を中心とせる宗教界の變革とは言

紹介

ふ能はず、其處に明かに社會性の認めらるゝに至つた所謂宗教諸改革、殊に其最も輝しき華と實を結べる清教徒革命の研究に稿を起し(第一篇)、次で啓蒙君主の一人たる普王フレデリック二世の政治學說を紹介研究して其進歩性の限界を明示せられた(第二篇)氏は茲に愈々佛蘭西革命の原因(第三篇)、勃發並びに其經過(第四篇)、ナポレオンの制覇と没落(第五篇)に迄及び、而も最も詳細に後三篇を研究してをられるのであるが、斯かる世界史的、相互關聯的立場に立脚せる比較研究に依てこそ佛蘭西革命が最も典型的なるブルジョア革命と謂はるゝ所以のものが、而して又宗教改革並びに啓蒙君主の歴史の意義付けが明確にさるゝであらう。其等歴史事象の正しき把握と認識が茲に初めて可能となり成立する。

故中村善太郎氏遺著「佛蘭西革命前後」が吾々に教示する處のものは何よりも先づ斯かる歴史研究に對する態度に就てある。

素より氏がオーラルに私淑し、假令單なる政治史の其ではないにせよ、政治思想と關聯せる文化史的政治史の

立場を執つて居られた(大類伸博士、同著への序)以上、其立場に就て若干の問題、又此際特に重要性を有つと思考せらるゝ幾干の概念混亂(例へば第四篇第一章の劈頭、佛蘭西革命の意義に於て見らるゝ如き同革命への政治、社會、社會主義革命なる諸概念の誤れる把握と混用其他)等瑕瑾なしとはしない。然し仄聞するが如くんば、氏は其後既にオーラルを揚棄してマチエの見解を持せらるゝに至つてゐたと謂ふ。果して然らば此遺著又氏にとつて既に歴史的なるものであらう。筆者茲に於て愈々、自己批判飽迄峻嚴にして常に斯學の發展に献身されし氏に衷心畏服絶大の敬意を表さざるを得ないと共に、斯かる瑕瑾決して同遺著の眞價を減する能はざるのみならず、否寧ろ却つて更に燦然たる光彩を放つものであらう事を確信するものである。敢て西洋近世史研究者のみならず一般讀者の必讀を切望する所以である。(改造社發行、定價三圓五拾錢)(西井克巳)

O. A. Shewan, Homeric Essays, 1935

シェリーマンに初まつた多くの考古學者の活躍とその

目醒しい成果とは、ギリシア古代史の研究に新たな方向と視野とを開いた。ギリシア青銅文明時代の唯一の而かも信すべき記録とされてきたホメロスの詩篇が、解剖され、分析され、再組織が試みられた。かゝるホメロスの取扱方は、即ち、この著者の謂ふところの destructive criticism は前世紀の末には隆盛を極め、遂にはその本家なる獨逸にあつてさへ反動が起るに至つたと、シェワンは序文で言つてゐる。正に、ホメロスの研究はかやうな經驗をへて來たのである。そしてラングに捧げたこの著者はこの「破壊的な批判」攻撃の亂射の内に立つて、飽く迄傳統のホメロスを防衛してきた勇士であり、この著書は敵の矢を防止し得たと信する盾の武功の数々でもあらう。かくてこの書は一九一一年から一九三一年に亘つて、著者が Classical Reviews, Classical Quarterly, Classical Weekly, Classical Journal, Classical Philology 其他の雜誌に發表した論文五十四篇から成り、七編に分類されてある。

再び序文に見るならば、最近五十年には破壊的な批判